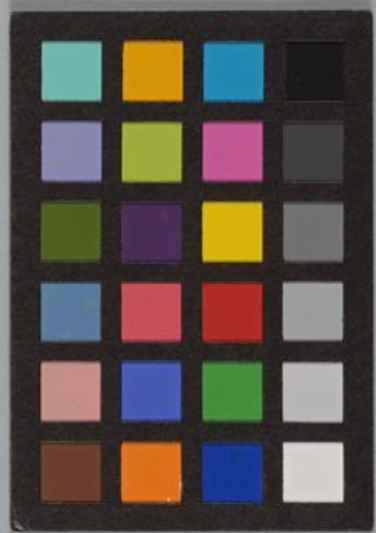


和歌古語深秘抄

NO 940.  
10.

耕雲口傳  
桂川抄

九



和歌古語深秘抄 九

都留文科大学附属図書館所蔵

耕雲口傳

び十とせあまり白川の東花頂心の奥は幻質  
なうよせし一廉承は友をむすひ泉石し心を  
とまりてあしうく次はとに應永百代後永松十あまり  
五の年やよひの末はとこあ光りありのきこむ  
きハ動ををうは是かくし花ハを前より  
散みりて跡そのあひしもおちりゆくはす  
ゆかとりよ心居しそは僧尋まうてき  
そは法談なるやの次よりをまやうをま  
道まておちりゆくをておのちりま



道とたこされくよにありとくしひふ人か  
おれをくくもますといふあたま一斎の意  
の意をれ細腰も無道の王の御心  
にまねひし〜〜〜りちりて我豊葦原  
の代ははは〜〜〜る舊俗るれと誰う是を  
よらこしき〜〜〜津波止の好所〜〜〜ふ  
と〜〜〜先聖の格言もたもひ志〜〜〜徳あり  
教ありぬ力をよひなき道されとも高心  
をあふき景もふはひ〜〜〜侍は道志  
と〜〜〜りい〜〜〜ぬおれをりより又い〜〜〜やうに〜〜〜

へきものにはおれをとく予答七八果のむ  
〜〜〜と先孝内のお母いゆうちきり人のひま  
のトをくもれすみやけ〜〜〜ものまもるひ  
ま〜〜〜まのみちとの〜〜〜れんせれ徳と流  
れの諸藝もあえてすものい〜〜〜あ〜〜〜侍  
〜〜〜や〜〜〜骨なう〜〜〜のみな〜〜〜て弱冠が年  
〜〜〜父兄の大故にあひ〜〜〜三〜〜〜時の信と友  
衣〜〜〜のゆ〜〜〜い中〜〜〜力〜〜〜ら〜〜〜に〜〜〜れ人の色は  
や〜〜〜は〜〜〜建〜〜〜く〜〜〜諸の道な〜〜〜も〜〜〜ん〜〜〜か〜〜〜う〜〜〜す〜〜〜く  
羞のよれあ〜〜〜ぬ〜〜〜な〜〜〜ひ〜〜〜り〜〜〜な〜〜〜ら〜〜〜も〜〜〜生

死大なるの工丈よ外ハありしはむふすか  
くてや一月とくを秘しはふ見りらのな  
いもすむむすかをして未乃よとくひまふ  
きあに信列の中書王尊良親王と同えき勢を  
まひしはうきまきくをわてけり後醍醐  
の沖門沙子外祖父ハ為世の入道大納言沖  
女贈後三位為子そくし本曾路をふよりて  
よれおとくよりを御勢行ひしに此道のか  
まれ幼齡よりをせよかれをく晩年ま  
風格あはししそりてをくおとくせし

と約夕親近して此道と向そくまひり  
ほよ目しちのあやまり少のおとくにきえ  
雪のおとくよりつけて露るりの力量もお  
きふげらよ後よは新葉集撰定のよを  
き人委附せられそくまひりあしきとい  
ほりかくてまき水漂泊の身と成るよ  
ありしをにまきまはひるあしきとせし  
みか隔生のよおとくよなりしよ此道の秘  
まは交るよたつらよをいしよあはしき  
をくおとくまほうはし目きいましよあは

此の書をけしむるはのこるふいさうふれをいひ  
とて一所詮あはれなりとてゆりてより此道お  
これりといふも古來此先達のおととふれも  
さうて信をせぬまじもなかくて過いといふ林  
修りの乃ゆりせしり困窮のうらに自然然  
心ゆりり万物の性ハ不生不感あり生滅小  
あつてさう性万理と具足せりは一性天地  
さきそりてあつてすやいふともなくこりち  
ゆり天地をなれてもさうさうあり是万物の  
根源なり和歌のふとをりまうと則是より

あはれはらわれてありやいふを相の上はこ  
とをゆりされと天地あひまされ陰陽共に  
さきりて日月星辰ハ天より付山川草木  
ハ地より付ちり日也と木也日入るも天  
地乃うらにありやいふあはれ何まじい  
その道ととられをさや吟詠して花をあ  
それいふをわさしむハ既よおととにをり  
それと和音乃才二義門あり歌の真躰  
よハあつていふなり一奇をて日本の陀羅尼を  
是と古人是といふ又神明佛陀菩薩を

これよりよきとあらざるものへ行なるハ只は深  
 理あるよよれちよころあり先抄三十一字  
 ありはあつて付く堪能と不堪あると堪  
 能といふハ生付ふつひかとおとのこととらり  
 そとくくおとあつてゆうひよ屋きくもそを  
 不堪といふとこあらざるも詞はくならなり  
 ちるもあれや堪能とそのみくさのこけいこ  
 の功をほじいとまけまはは弁ふさせろ秀逸とい  
 てこそ不堪とせらて是をくか先と目比の  
 はいかなきとらるなりとくめて堪能の志わさ

とあらざるもはらり或ハ生付るくくしてあつた  
 れひハまらひくくは其切とるすよいさうて  
 そひのたのいと書付くくといけるも此理あり  
 道人の中よ利根の人ハ一同に語す純  
 根乃人もあらざるをくくはは弁よ言的  
 の實性くくあつてくくも生付ふか  
 そくみにあつてくくやくも人乃けいこの功と  
 此みくくありくくも達者やいとあつたり  
 其一人古今本はくくも寝食をやとれか  
 ずと忘却して胡夕の月乃くくもあつた

をすまのしきのの毛しあつめをこししてち  
このまのあつめをこししてちをみるは一本す  
とあらうかけを商人のい流も胸すく大鏡  
國のあつめをこししてちをこししてちをこししてちを  
すにあらうちをこししてちをこししてちをこししてちを  
のうみてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
見ゆつちのちをこししてちをこししてちをこししてちを  
時をこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
あらうちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
きこちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを

付く初は人のをこししてちをこししてちをこししてちを  
流をこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを

一歌を録すは時をこししてちをこししてちをこししてちを  
いふちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
八方の物れをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
とちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
うをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
すをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
詠してちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを  
は歌道はちをこししてちをこししてちをこししてちをこししてちを

ひのしあゝらや<sup>三</sup>三代集のすゝも  
後拾遺のすゝら<sup>二</sup>やうばさだおとのま  
きりてきこゆるなり子載集のさきほ<sup>一</sup>後信  
卿基後後頼おぬくは道中真せりいんや  
西行上人後成卿定家卿たや和歌の大層ん  
りありあ<sup>一</sup>新古今の一集文質合意  
て今古のいひあきぬあ<sup>二</sup>を<sup>一</sup>みあ<sup>二</sup>淳  
古の凡一爰す<sup>一</sup>い<sup>二</sup>も<sup>一</sup>共古ゆとまひ  
く先<sup>一</sup>い<sup>二</sup>も<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>を<sup>一</sup>ま<sup>二</sup>い<sup>一</sup>い<sup>二</sup>い<sup>一</sup>  
う<sup>一</sup>力人の口も<sup>二</sup>録<sup>一</sup>う<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>先<sup>二</sup>年<sup>一</sup>のみ

事

六

らふ<sup>一</sup>く<sup>二</sup>相續<sup>一</sup>せん<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>う<sup>一</sup>を<sup>二</sup>お<sup>一</sup>よ<sup>二</sup>ほ<sup>一</sup>  
ま<sup>一</sup>よく<sup>二</sup>絶妙<sup>一</sup>の<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>と<sup>一</sup>業<sup>一</sup>か<sup>二</sup>本<sup>一</sup>絶妙  
とい<sup>一</sup>て<sup>二</sup>て<sup>一</sup>人間<sup>一</sup>の<sup>二</sup>考<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>日<sup>一</sup>別<sup>二</sup>と<sup>一</sup>る<sup>二</sup>は<sup>一</sup>  
た<sup>一</sup>人の<sup>二</sup>い<sup>一</sup>ひ<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>を<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>り<sup>二</sup>但<sup>一</sup>た<sup>二</sup>つ<sup>一</sup>  
き<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>と<sup>二</sup>よ<sup>一</sup>ん<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>を<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>り<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>り<sup>一</sup>玉<sup>一</sup>極  
乃<sup>一</sup>お<sup>二</sup>ひ<sup>一</sup>を<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>り<sup>一</sup>か<sup>二</sup>す<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>れ<sup>一</sup>こ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>り<sup>二</sup>取  
けて<sup>一</sup>一<sup>二</sup>重<sup>一</sup>の上<sup>二</sup>れ<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>を<sup>二</sup>業<sup>一</sup>い<sup>二</sup>す<sup>一</sup>を<sup>二</sup>し  
古<sup>一</sup>人の<sup>二</sup>え<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>の<sup>二</sup>う<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>り<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>を<sup>二</sup>標<sup>一</sup>と<sup>二</sup>し  
い<sup>一</sup>は<sup>二</sup>是<sup>一</sup>ち<sup>二</sup>り<sup>一</sup>を<sup>二</sup>い<sup>一</sup>く<sup>二</sup>案<sup>一</sup>か<sup>二</sup>り<sup>一</sup>て<sup>二</sup>を<sup>一</sup>せ  
の<sup>一</sup>う<sup>二</sup>を<sup>一</sup>み<sup>二</sup>く<sup>一</sup>も<sup>二</sup>ハ<sup>一</sup>そ<sup>二</sup>と<sup>一</sup>ん<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>り<sup>二</sup>乃<sup>一</sup>う<sup>二</sup>を<sup>一</sup>

事

六



も重くありて教へし五十二位をへくの母  
ふりあせしもさうそにあらと申すとす  
をいふ人をもて年説をくみり容儀よく  
文章伎藝をにすられたりとも公ふれども  
のハ見とて世を治りそを治るは  
文章伎藝ハ奇のふとてのい

一 詞と見らくへきま

詞ハ歌の文ナリかきりたりと後撰拾遺より  
金葉詞花のころはひひましくハ奇をまじり  
あらをむとてとてとてとてとてとてと

かきりたりとて歌のともといやまにい  
り君事合躰時節到来とふよりとて  
新古今の一集公乃泉みあしとあしと  
よはしとて詞の花よりひそ人あして人  
とたたらし人乃身とよととてとてとて  
を織んて金石と合巻とふりいり  
しつ又あまりにやとて詞をなす  
かともふりよりとて極上の達者とも  
とてとてとてとてとてとてとてと  
いみけ建はまくの歌人やハ其月

そりりいさめをききあはれんまうゆてく  
さのけけききあやうなまはらまはま  
中意りあすうくく文地とこう  
鬼神をまやまうくかやまをまの  
とまうくくあはれまの文質根に  
て君子なりと孔あはれまの文に  
あつてよまのまをまのまをま  
あはれまのまをまのまをま  
まをまのまをまのまをま  
まをまのまをまのまをま

をうまよりちまをまのまをま  
八同ふりまをまのまをま  
てまのまをまのまをま  
ゆく感情をまのまをま  
のまのまのまをまのまをま  
是ちりまのまをまのまをま  
まのまのまをまのまをま  
一首とまのまをまのまをま  
まのまのまをまのまをま  
けまのまのまをまのまをま

く儲ぬまはあちもはむとくわくならるり  
 〇うなるれとておとくはゆらせりす  
 れきりなれおと集た三代集とわつとと  
 〇りむと世のす志りちるふ志さして  
 歌のくもむけくちりのたまひとてか  
 来かこしそとゆりくと志るおと集はて  
 〇くたはし乃集のおと集詠とてきと吳  
 論あふくす張又古今後撰のおとて  
 とも同あしおと集くむく不可詠又  
 〇くくおと集のつうよははけぬと三代集

たはをそあとして其詞よみそあと必の  
 志きまきあしてわらうを入てあをを  
 みいさわことああハをく古きこと集とよ  
 又そあちりけり又高名り也を古詞  
 ととりてわら風情とあさり、失くは上子  
 のちやちり近來連歌の詞と奇にありし  
 てよむすあり是奇の淺近りちる基也  
 昔の連歌ハあけりくに奇よとてしむ  
 くらめふあはあ入る先をり

也よひまは

あも思ひいそめをれ乃のりか  
 と付らりやうなるは上下の句と歌  
 しそりともく(句)かりし今やうの連  
 を歌するそそく文に六義の  
 叶つる歌の詞を奇にのみ連歌  
 と連歌とせん奇よも達せ人  
 とも連歌又古来の一道ちり  
 是とれ(併)く  
 にありす

一本歌取様くもす

古にいふとめく中古来ののみちり  
 を今

集の奇に万葉集の奇と同様なる奇  
 此の奇の分よりなる一  
 只万葉の  
 奇とや  
 字を  
 中より  
 なる  
 奇也

此は詩歌の奇也  
 黄山谷の點南の十絶は白樂天の詩と  
 或三に字或二字を  
 或三に字或二字を  
 長一山谷を  
 今乃世一本歌取と  
 是也

吟を三百篇の詩ハそそ性情を吟詠と  
 我ら有りいそものよよふありありしを  
 李杜韓柳の詩ちとて詩書百家の  
 詞さちの曹幼劉陶謝の詩ちとをとり  
 てあちとそそみまう字さふ今乃  
 奇の本歌取燬し可叶季の奇を  
 と系雜にとりは戀雜とそそ季にとり  
 かしこしておと氣そりなをりてあちと  
 あちとそそちたりあちとそそり本歌  
 とりちそそ歌

いふせむおの求おまのほい  
 まここにわんてしうさめり  
 老の恨あきけおちうあちち  
 おもいまはすおのまのやま  
 はそそひを色を季にちそそ例を  
 後の奇あ端にわたり又同季景物ち  
 とそそをいあちとちりぬれち  
 まちり

おほうふ梅乃よひひにかをみ  
 くらりもそそぬまの東の月

かふ心まてくまふ心のたもふ月一又

わつ方ひとりの心結まふまを

はぬ首ハ其季をへすして殊幽待<sup>悠致イ</sup>あー

さげらや約束の輝の月もやをて

月をささくうらぬくひ先

わをれなんまひとるひさうあつくに

いさくらの心つらねふあき風

是又大意とる一例也

又本歌の詞のをと所と久をい凡骨わ

つそく少田よりぬく玉所替結もたあ

あつあつ〜はははよきあり

まめのはれちくえをし月ハかの

心は〜おもひゆれかろうに

おろゆもうはれをくへ川よの中り

人のあちまをぬく光の袖

はそく〜ひあしうあふへき古今本歌取

れ本はちりぬき歌勝中をもく次あそ

といせは疎ハをそ志あへ〜又本言と

あよをよして弁作といえ何人まをきさる

歌人首の奇ととくあて〜ひはちりあはれ

をたつてよき奇に似れどもぬかきまな  
情と吟詠せぬよりてたゞ骨傳り姿  
妙ありことこれありはちも也は情こもて  
歌取やうの粗心持は下

一 當座の歌よむ時可心得

歌と虫首はくも十首もとりをりん時  
ハまの其野を一にのみとては歌は  
かくよむへ一彼野もくハは月勢とて次  
へ一とよき御よかあてくひと一ち柳葉  
しうらて後取分秀逸のがまぬへは歌

たやよれて能く案すし若あまのあま時  
くくくハ能くよとよんくとてとんハ一  
座の歌詠書そらるるをんとき我歌よよ  
まぬ奇もてそららるにせれよゆきれ  
ハいよハまよひしてかくつてすあまの  
洲花の沙會ハ三首より歌とてくす  
種ハ上位乃人種ハ木みやもつ方よみあは  
て次乃人ハ歌とゆき家ハよもころとて故  
人ハ心ひらうハ歌して一座の奇詠集ハ  
ハ一月讀むらんハ毎夜秘傳を也清補

初事う諸人の言等してききく一月讀とれり  
 けうましく世ありあ水のみちみと云うを  
 とよみくくうとくくあまにけうも中く殊勝  
 御うさせきりもああは一産をきんんと  
 へ末練の玉格かろし

一 垂日か起の時可免事

尚座出起の時ハ餘念よわき次を案す  
 於よありて中くまう一産もあま也兼日  
 乃時く余日あをその又て何とまうとあ  
 と公遺教はしてうらむやふをのまうい

建は君長よ仕難云末定よ對面一の  
 分やよ約日近成てそめておらるる案  
 於よありてそく尚座まうく何とまうあ  
 なくまをとりきあるる奇とひす時よ  
 他人ハ月意あうして案一益をるけあ  
 けけらる奇よみて人わうれりたをの  
 道も物うく運届のわかく也只取取をん  
 ちめ尚座のあひをるしてまうあんこ  
 きよう他不虞にあはしめとと表狀傳は  
 は理双个押は尚座垂日のお案を難い  
 坊あき



おとちのあはれおどしき是としはす人きりわく  
 わるやさうらう人きりわくおどしきまじりてすれ  
 ともやすきまじりあやまのをむらあり疾  
 疾い不死して相席に死をゆきい人為  
 ぞあり昔虫代の時馮唐といふ人君の使  
 り寫に趣ける大劔の小劔にちて峻  
 難をとるるとして八馬をゆきせすく  
 とみとよく取く終ふまゆゆ人なく過る  
 う高の都り成都といふ平地よくお安  
 くおもひてあはれき蒼馬しやの三十字

はくく内くやもきおとみか人思り志意  
 にハ一木すやおのりるるる餘りお  
 とあきまはるをさみりをくあり

一初字の人古款乃神りて意得分  
 へきこと初山ま心むく何とての上平  
 の其道とえく自由自在りあを兼に  
 あつとも福とも其心と庭にわくせせ  
 勢りともりかこよめお神りくやま  
 くてうかあおををらるる案りて達  
 者といやかりんまをこは是才一のひ

うまぢちありあうそのあつめののみをう次承  
 けしうりまくとりちりそまよ乃西経ありあ  
 やうにおとんそまよ一山一筋目あつて  
 大庭うらわんよみまてゆげとや一月を  
 うま抄とあつらわぬれん自覚しむし  
 の人はそまらさうひまていぬく敬を  
 歎もまのいしうか来たり初公の時よれ  
 らるまごうまよまんまごるむことそま  
 と昔唐國の中に宋と云國ありとある  
 就田ままてなれ日つ田の苗のみし

まおと紙あけまきほねをかりてこはぬ  
 きあけとと長ちまじとて苗のふ  
 教をまらさういしおはけ理諸道り  
 日まそおは伊大宮北内府妙音院念  
 相國ありひをまらひまはあつ相國  
 禪門志梵されけつと伊分のひえ日來り  
 わらくゆゆいやうにまいこすまかま  
 はまければ内符答て云別一まらまゆ  
 すそまゆひとのあまらま殊勝おれゆ  
 ねがしに信とてうやうにまら引ゆん

とそくなみゆつとしひをれねばは故ありかま  
て仰のま孫す人かもと志先されや  
も此道理ちり常に本としてまらふなき  
神のうき

あくちちちのーのほそきしして  
うに志られぬ言うゆひ  
うか心やそししとねふみを  
それちりるんや人もん  
おやーちと花さきうむらむ父の  
うーびーのうにやうー

あそはまき梅のちうも色あをし  
るゆ月乃ちけきのみうと

ひそくひたまあふも失あうしうき神そ  
公初をうして一ゆあうなり其歌り  
於てハ秀逸ちれと後生秀歌のわわら  
ねんきりあうす後学も編ひうこなふ  
へまありまうひてわらわらき神

まの葉も心身のうきうきとえそ  
み編りわらわらうきその  
秋とそたえれんとねふ月をを

さもあやわくはうけくらゐ  
 ものねもこそやれ路や八神をく  
 ちうちそくり那悔まゆふれ  
 張くこころいふあつのおさ那く  
 ちねふかうもれよそりもみり  
 うけり紗雲うけり一のこゑすなわ  
 りういぬきまのかけままやま  
 よれは家世もせの草乃かけろひ  
 すしくこころいふまらまら

されは上の凡骨と云そ幽意微詞不

しちりいせいへとも中くおとれそかー初心  
 の人那ゆ神とねりろくねりひてまねひ  
 よまは邪路り落へきまじ建定あり千  
 歳乃いひい道を發得もば人今  
 人う中ふ一人が来おとけはをのけいよ  
 みもやせんすん先年老拙子首よみて  
 信別中書王より奉り合珠を一時中  
 の歌よとふへき人をもよもふにともや  
 よ珠をあひそもひくおとまをとお海うに  
 かきそ人けいおい蓮生ねひよりけりこ

り感すふとるるの我二百首のうそを  
よみて見ゆは是をよきしひて玉の  
乃奇合と名付るは中よ其の風情有  
いまこ人も見せぬとよもあつとて其所  
歌を板おぢりけひー

おれこれしとてねんすはよきま  
す急ぎの風乃燈のそけしと

は一首古人も及ぬし後に新葉  
集り入つて是又まゆのこきあつる  
おのそくひ古來に傳へ建とて心肝よ

みそあつりるは是とくなり所詮は質  
おとはかやうによまんとして秋を秋たせ  
く生とへてくもあつれよみよまつとてま  
そ高上除真なれとつらきてにまんとあ  
えて物公るりよかともよあまんとてまぬ  
へま奇乃拵

あにさびく悔のあはれあつる人よ  
ありあつる人のあまよ見ゆ  
はのくに乃たはるの春はあまなれや  
わのわれあつる風やあつる

ありとて乃そよのそよに井の鳩ま  
 ともよふと志のすこたゆふれ  
 又やんんやんぬみのおくくあり  
 花のゆきちらまのあけけの  
 ぬきくく花をら花よ何すきこて  
 心ほくききききになくぬめ  
 わともすすくくくくくくをみ  
 かつこの本も志と今ととくぬ  
 うれふ歌乃面よ志とくゆくすきこ  
 やううみえくああらりに保けぬし

と物公の人ハ行かるさのなうく保け  
 いてハ人似せくくき幽玄高妙の志神  
 をそまう知音くあすたゆくの  
 け肉くくをの時多ハ近代為世入道大  
 納言詠才の幽情古人り及て人を感す  
 都高凡をによりて是とくくありこ  
 れうそよよをうらきくよああら保あ本  
 とそやふよよゆんとせなまこくく換を  
 ぬまりあき乃一例ほくくくくもた  
 ありの平懐奇くくをらぬくく保くくへ

きなり以前の六ヶ條六義よりよくて是  
をいせりおれハキと堅固の初四乃を毎  
に志先をこととせりて汝義より及て予其上  
い道の秘よりなといやす別にあふすす  
只我をよめいって心ととていふまじなれ大  
く趣向たよりし公得をくも肝要ハキと  
教寄れをきり一ちり京極入道中納言の  
本沙子丸の二門此道の宗匠なり彼家  
やと違者と教寄れ人をと執すより一故本  
者よりハ教寄れ人と執すより一故本

かより行ひりちり彼大書ハ為世入道大納  
言存生の時為友卿定為け下此一  
門の人々他家より小倉公雄入道中納言  
ホ合一して定家卿遺法京極ありて  
毎月の辛れ談義とて不闕よりとせり  
時不縁よりりて其一取よのろみそ幼年よ  
つ身とてうそせりしとれとてきたる教  
寄の人を一義に貴般一びつとてかより  
そまひひを世のいそれあふす也  
秋道に付く古より口傳るとハ古よりし一

もと先んあれをわづらふ不審もた向くなり  
 まこと志すすもわのひきりそとよみいそ  
 す秋六義よかるひて人倫とやらけ鬼  
 非とんせむはらう此道の詮要をれ先  
 拙きつめて本来不堪の勇よそ私智たまこい  
 くたくちるあふとえは道とんそ依字あり  
 て其餘の和漢乃た藝をさういうはかあそ  
 壮年乃らちハむひひらうともそれ乱中よ  
 年とをとりてたらくもきまもゆるすは  
 てげとこいとせとらハ山林は流落して何す

も陽世のあつくはかりにそれ行つ八人と道ひか  
 とのゆもゆるまは條と只一時の困語とそやな  
 を後日の瘵忘に備へそは大概たる一そあ  
 一ふそよ一そひく乃ち悲情れれやそよよ  
 よりてとくかりちる筆と條ふもの也そ  
 も顕昭は橋う故喬ハ今のそよハなれもの  
 とう多う年公坊ゆに其あり未学れ一  
 童子云霞線のおとくよつめりて方を祖  
 凡と忘れよは道よ公さあつよりかりけひ  
 一とうあつうよあされよさひ行れ他是ハ禁



割られし人一目又せそ其の故ハすみやう  
 に丙丁童子にまけけり故ハ後まて後  
 里やまのんまのハ一ふを位より玉けりぬ  
 のめ非も恐あり又ハ當時のあきなりそ我  
 のそしつともれれやう後世の揚子雲ハ  
 うれそしつともれれやう後世の揚子雲ハ

右此一卷者南禅寺禅栖院耕雲  
 魏公上人所述而和評之道深切  
 著明者也最可秘之

文安五<sup>戌</sup>辰曆小春既望日誌之

於南朝補任也

○推大納言右大将藤原長親卿 法名明魏 又号耕雲

新後拾遺新續古今兩集共 明魏法師撰摘題和哥集

尹大納言師賢卿孫權中納言家賢卿息

○新葉和歌集弘和元年十二月三日奏覽 新葉ハ右近

大将長親ト有

中務卿 共仗 信列中書王ト申配於土佐國其後越前國於金崎城自  
○尊良親王害 後醍醐天皇皇子御母贈從三位為子入道大納言為世

挂明抄

愛者法系作

三月月 夕月夜 上弦月 望月

不知來月 立待月 居待月 外待月

廿日月 下弦月 五日月

三月月ニラレタ夕保ルウリ 夕月夕月 夕月夕月

夕月夜月 月のけり夕月朝夕月乃夕月  
夜月乃夕月保良物終夕月夕月夕月夕月  
夕月夕月一日二日の夕月夕月夕月夕月  
夕月夕月夕月夕月夕月夕月夕月夕月

月夜夕月夜とよきをうりしは  
 上経月の七日八日九日けぬ三夜うち月ふら  
 こす月ふらふらふらふらふらふら  
 望月を十五日とくいれ月より十日  
 五日とく此ふみちなる月の事を毎に  
 あふ牛暦との罪後よきあふす作を  
 不知物とす十ふらふらふらふらふら  
 ちふら月夜もす作りんしとくはつて  
 十六日とくさつとくしとくしとく  
 やとく月夜もす作りんとす

立待月 十七日とくあれも望ふより一夜  
 かきくぬまのこく作をさなり

居待月 十八日とくい子細を同ぢよ  
 斜待月 十九日とくなつりてい原茂物  
 女樂試の目を望月廿日はつりの事と  
 福乃とくつれさく物とくさくといは  
 長高廿日計乃事とく斜待の月さく  
 作るも十九日とく物とくちちあま  
 ちくいあや世式物等れちちあ  
 ちく作

廿日月とつて歌うとる重御承徳の比乃乃小

かきつらまを廿日の月名抄すらと

を代乃歌を抄すらふ引月ひん事を例抄やくい

八を抄抄と抄待とたる月とあそとらとこいも抄

月ふよりと廿日抄すらふ引月ひん事を例抄やくい

字をたくりとるとも月乃百そをたくりと額よ抄い

次来十九の月とあそとらとこいも抄

を抄候を

下経月 廿二日とる此来月ふんを例抄やくい

はくいとる引張月とい歌よはよ経候とあそとらとこいも抄

と廿日よりとら乃月候と残月ふんを例抄やくい

有明とアとつてとらと先賢の傳い也

と廿日よりとら乃月候と残月ふんを例抄やくい

此小冊依室町殿作所令徑進作也  
訛言喜蔭戒在鏡秀上之書之

文安五年七月日

和歌在洞老法下之利

